

教育学部学生が持つ体育指導の自信について

浅 見 裕*

(1986年1月11日受理)

Student's Confidence in the Teaching of Physical Exercise, in the Faculty of Education.

体育指導において必要な教師の指導力には、「模範演技」ができるだけでなく、子どもたちの「技能を高める」力も備わっているべきである。

教育学部学生の中で「体育科教材研究」を受講した者たちに、小学校体育における様々の教材について、授業を担当する自信の有無を問うアンケート調査を実施した。その結果、受講生の授業担当の自信の有無にどのような要因が影響を与えているかの実態が把握できた。また、跳び箱運動の指導の例を取り入れた講義の内容についても、跳び箱運動と他種目とは自信の有無の人数に差があるだけでなく、自信の有無の判断に影響している要因にも差異が見られ、講義の内容が受講生たちの認識に影響が及んでいることが判った。

しかし、「模範演技」の可否を判断の基準にしている種目がまだ多くあり、運動教材を指導する場合には、子どもたちの「技能を高める」ことが重要であることを認識させると共に、「技能を高める」ことができる指導力を養成していくことが今後の課題である。

I はじめに

筆者は、岩手大学教育学部において「体育科教材研究」の講義を担当している。「体育科教材研究」は、小学校教員養成課程及び養護学校教員養成課程の学生が、小学校教諭1級普通免許状を取得するためには必修の講義であり、大学で「体育の指導」について学習する数少ない授業の一つで

ある。

「体育の指導」の中で、特に実技指導を取り上げた場合、教師自身がプレイヤーとして自信を持っている種目では、一般に良い指導が可能であると思われる。その理由の一つに、模範演技ができることを上げる場合がある。模範演技を提示できる教師は、子どもたちを感服させることができ、権威者として自信を持って指導できるとする

* 岩手大学教育学部保健体育科

からであろう。反対に、模範演技ができない場合には、自信がないと言う人がいる。

筆者は、指導者自身が見事な模範を示すことができれば指導がうまく運ぶとは言い切れないと考えている。模範演技を見れば、子どもが理解でき、達成できるという保証はない。このことは、「体育科教材研究」を受講した中の、体育が苦手な学生たちに学んだことである。つまり、受講生にそれまでの体育授業についての感想文を書いてもらうと、「体育嫌い・苦手」とする者たちは、教師の指導で模範演技を見せられても「できなかった・わからなかった」とする者が多いからである。

指導の自信ありと言う人でも、模範演技ができるという理由だけで、自分の指導を省みないとしたら、その人の指導では一部の子どもたちには受け入れられないことになる。

昭和58年度後期の「体育科教材研究」の講義では、「現時点の自分が小学生に指導できる自信のある教材は何か」について簡易なアンケートを実施した。その結果、各運動領域の平均では受講生の58%の者が「自信なし」と答えていた¹⁾。もし、そのまま「自信なし」の教師になれば、「体育では遊ばせていけばよい」・「ゲームさえやらせておけば済む」とすら思うようになるであろう。このような考えを持つ教師の授業は、どの子も喜び、かつ向上する授業にはならない。従って、講義内容の中に受講生が自信を持つようになる内容を採り入れなければならないと思った。

但し、受講生たちの言う「自信あり・なし」の要因については吟味が必要である。例えばプレイヤーとして経験豊富であっても、小学生に対しての指導が適切であるとは限らないし、模範演技ができないからとして、指導力向上の努力を諦める

のは間違っている。受講生たちの認識を正確に把握し、彼等の認識がどんな要因に基づいているのかを見極めて、対処しなければならない。

本研究での目的は、小学校体育科の授業を担当する自信の有無について、教育学部学生たちの実態を明らかにすること、及び「体育科教材研究」の講義が、受講生たちの指導力に関する認識に影響しているかどうかを明らかにし、今後の学部における体育科教育に役立てようとするものである。

II 方法

A アンケート調査

昭和60年度前期「体育科教材研究」の最終講義の時間に、現行小学校学習指導要領の体育科の内容になっている運動領域の中の種目について、現在の時点で自分自身が授業を担当する自信があるかどうかというアンケート調査を実施した。

この調査から判明した受講生たちの実態と、講義の影響についてその一部を報告するものである。

- (1) アンケート回答者数 243名(講義出席者)
- (2) 考察対象者数 岩手大学教育学部小学校教員養成課程及び養護学校教員養成課程に在籍中の174名*の学生。

* 回答が不備の者、中学校教員養成課程の者及び保健体育科所属学生は今回の報告からは除く。

- (3) アンケート実施日 昭和60年7月15日
- (4) アンケート記入時間 9:50～10:20の講義中の30分間
- (5) アンケート項目 (第1表参照)

B データの分析

- (1) 分析対象種目 本学部の「Ⅱ類体育実技」²⁾

1) 浅見裕「小学校教員養成課程における「体育実技」の授業 ―実技指導力形成への試み―」(日本教育大学協会研究促進委員会編『教科教育学研究 第2集』第一法規出版、1985年2月) p. 164。受講生203名に対するアンケートの結果より。

2) 本学部で指定している小学校教諭免許状を取得するための必修の教科専門の単位(1単位)の一つに数えられている保健体育科の実技の授業である。

第1表 小学校体育教材を指導する自信の有無についてのアンケート

小学校体育教材を指導する自信の有無についてのアンケート 年入学 課程 番 氏名 (男・女)

*Ⅱ 親体育実技は 受講(した・しない) 単位取得(済・未)	*体育経験は 受講(した・しない) 単位取得(済・未)	*中学校～大学で運動部の選 手になったことのある人は ()内に種目名を記入し て下さい(複数でも可)	体操		器械運動		陸上運動		水泳		ボール運動		保健		基本の運動		ゲーム						
			リズムミ カルな動 きを高め る運動	素早い 動きを高 める運動	力強い 動きを高 める運動	動きを持 続する能 力を高め る運動	鉄棒 跳び箱	跳び箱 リレー・ 短距離走	走り高 跳び 障害走	走り幅 跳び クロール	平泳ぎ 逆飛び込 み	バスケット ボール	ボートボ ール	サッカー	表現運 動	体の発育・ けがの防止	病気の予防・ 健康の保持増進	集団行 動	力試しの 運動	模倣の運 動	固定施設や 器具用具を使 った運動	水遊び・浮 く・泳ぐ運 動	ボール遊 び
A1 授業を担当する自信がある	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
A2 授業を担当する自信がない	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
A3 どちらとも言えない	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
B1 指導してみたい	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
B2 指導したくない	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
B3 どちらとも言えない	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
C1 好きである(自分自身は)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
C2 嫌いである(自分自身は)	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
C3 どちらとも言えない	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
D1 児童の技能のどこが良いの かわかる	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
D2 児童の技能のどこが良いの かわからない	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
D3 どちらとも言えない	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
E1 児童の技能のどこが悪いの かわかる	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
E2 児童の技能のどこが悪いの かわからない	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
E3 どちらとも言えない	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
F1 児童の技能を高める自信が ある	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
F2 児童の技能を高める自信が ない	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
F3 どちらとも言えない	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
G1 児童の前で模範演技ができ る	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
G2 児童の前で模範演技ができ ない	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
G3 どちらとも言えない	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
H1 児童の前で悪い見本(欠点 のある動き)を示範できる	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
H2 悪い見本を示範できない	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
H3 どちらとも言えない	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3

*「体育科教材研究」・「体育経験」・「Ⅱ親体育実技」の授業についての感想・意見(改善点や批判など)を裏面に自由に記して下さい。

で重点的に指導している運動種目である。器械運動・水泳の各種目とサッカー・表現運動を対象とした。

- (2) 回答の分析方法 各種目について数量化理論Ⅱ類³⁾による要因分析を行う。

- (3) 分析の手順

- ① 回答者を授業を担当する自信が（あり、なし、どちらともいえない）の3つのグループに分類し、この分類を外的基準（Outside variable）とする。
- ② 各要因の回答を質的データとして扱う。
- ③ ①・②による外的基準のある質的データを、数量化理論Ⅱ類のプログラム⁴⁾を利用してマイクロコンピュータで分析する。

- (4) 要因（Item）

- ① 指導の意欲があるか
- ② 好きか嫌いか
- ③ 児童の技能の良い点がわかるか
- ④ 児童の技能の悪い点がわかるか
- ⑤ 児童の技能を高める自信があるか
- ⑥ 模範演技ができるか
- ⑦ 悪い見本を示範できるか
- * 以上の要因では範疇（Category）は3個。
- ⑧ 運動部の選手になったことがあるか
- ⑨ Ⅱ類体育実技を履修したか
- ⑩ 性別

* 以上の⑧～⑩の要因では範疇（Category）は2個。

- (5) 使用機器 マイクロコンピュータ

（機種 NEC PC-9801 F）
プリンター
（機種 NEC NM-9400）

Ⅲ 結 果

マット運動・鉄棒運動・跳び箱運動・クローリング・平泳ぎ、逆飛び込み・サッカー・表現運動のそれぞれの種目について、分析結果の一覧表を第2表～第9表までに表し、また、各種目の散布図を第1図～第8図までに示す。

Ⅳ 考 察

大学の授業で「体育の指導」について学生たちが学ぶ時間は少なすぎると思う。この時間の枠の中で「体育科教材研究」の講義担当者としては、受講生に対して「どの子どもも必ず向上させることができる力」を養成することに寄与し、自信を持たせなければならない。到底、小学校で扱う全種目について述べる時間はない。

そこで昭和60年度前期の講義の一部で、範例方式⁵⁾に倣って跳び箱運動の指導の例をあげ、教師としては自分自身の指導力を高めなければならない、「跳ばせる（技能を高める）」技術を身につけている必要があると説き、子どもの実態に応じた指導の方法について講義を行った。特にここでは向山洋一氏の著書「跳び箱は誰でも跳ばせられる」の一部⁶⁾を資料として、跳べない子どもを跳ばせる方法と原則を紹介していった。

筆者は既に、「子どもたちの動きや考えの中の何が良い点であり、問題点であるかがわかり、どの子どもも必ず向上させることができる力を実技指導力」とし、「体育では、どんなに熱意と愛情でカバーしようとしても、実技指導力を持たない教師は子どもから本当の信頼を得ることはでき」ない

3) 田中豊・垂水共之・脇本和昌編著『パソコン統計解析ハンドブックⅡ 多変量解析編』共立出版、1984年9月）pp. 270～279。

4) 同上書 pp. 279～292。

5) 池田猪佐巳著『教授学に基礎をおいた小学校体育科教育研究法』泰流社、1981年12月）p. 35。

6) 向山洋一著『跳び箱は誰でも跳ばせられる』明治図書、1982年2月）pp. 9～31、67～73、をコピー印刷して受講生全員に配布し、講義の中で読み進め、さらに内容要約・読後感想のレポート提出をさせた。

し、「授業において、子どもが教師を最も信頼するようになるのは、できなかったことが教師の指

導によりできるようになる」時であって、「子どもにとっては自己修正は困難なことが多く、たと

第2表 マット運動

要因	範 疇	人 数	I 軸			II 軸		
			カテゴリ 一数量	範囲	偏相関係 数	カテゴリ 一数量	範囲	偏相関係 数
要因①	指導してみたい 指導したくない どちらともいえない	101 41 32	-0.27657 0.57069 0.14174	0.84727	0.40979	0.44259 -1.43898 0.44676	1.88574	0.40771
要因②	好きである 嫌いである どちらともいえない	63 55 56	-0.37755 0.18721 0.24088	0.61843	0.31816	-0.47939 0.11738 0.42402	0.03410	0.21085
要因③	技能の良い点わかる わからない どちらともいえない	82 26 66	-0.01526 0.03903 0.00359	0.05429	0.02359	0.12084 -0.45311 0.02836	0.57395	0.10067
要因④	技能の悪い点わかる わからない どちらともいえない	96 28 50	0.05286 -0.05066 -0.07312	0.12598	0.07352	-0.28701 0.64606 0.18926	0.93307	0.17731
要因⑤	技能高める自信あり 自信なし どちらともいえない	50 40 84	-0.22706 0.11942 0.07829	0.34649	0.17452	-0.41621 -0.04330 0.26836	0.68457	0.15864
要因⑥	模範演技ができる できない どちらともいえない	61 50 63	-0.70791 0.47460 0.30877	1.18251	0.48660	-0.11686 -0.29504 0.34731	0.64234	0.14464
要因⑦	悪い見本示範できる できない どちらともいえない	109 18 47	0.05115 -0.11983 -0.07274	0.17099	0.08411	0.03630 0.41737 -0.24403	0.66139	0.10036
要因⑧	選手になった 選手になっていない	104 70	0.02759 -0.04098	0.06857	0.04919	0.00381 -0.00566	0.00947	0.00268
要因⑨	受講している していない	124 50	0.03337 -0.08276	0.11613	0.07650	0.07008 -0.17380	0.24388	0.06573
要因⑩	男子 女子	80 94	-0.07919 0.06739	0.14658	0.10410	-0.11570 0.09846	0.21416	0.06276
外的基準	授業担当の自信あり 授業担当の自信なし どちらともいえない	51 52 71	-1.18208 0.95994 0.14605			-0.33020 -0.52846 0.62422		
相 関 比			0.69364 (I軸)			0.27441 (II軸)		

え示範（師範的なもの）を見せられても無意味な場合すらあり，教師自身の示範能力は実技指導力の一部であっても指導の切り札にはならない」と書いた⁷⁾。

これは「教師の仕事は，全ての子どもを向上させることである。体育では，全ての子どもの技能を向上させることが，教師の本来の仕事である（模範演技を見せることに留まることではない）。故に，子どもたちの技能を高めることができるかどうかは指導力のある・なしの基準になる。」という筆者の考えに基づくものであり，模範演技ができるかどうかは指導力の基準にはならないと考え

る立場にある。この考えに基づいて「体育科教材研究」の講義を行ったのである。

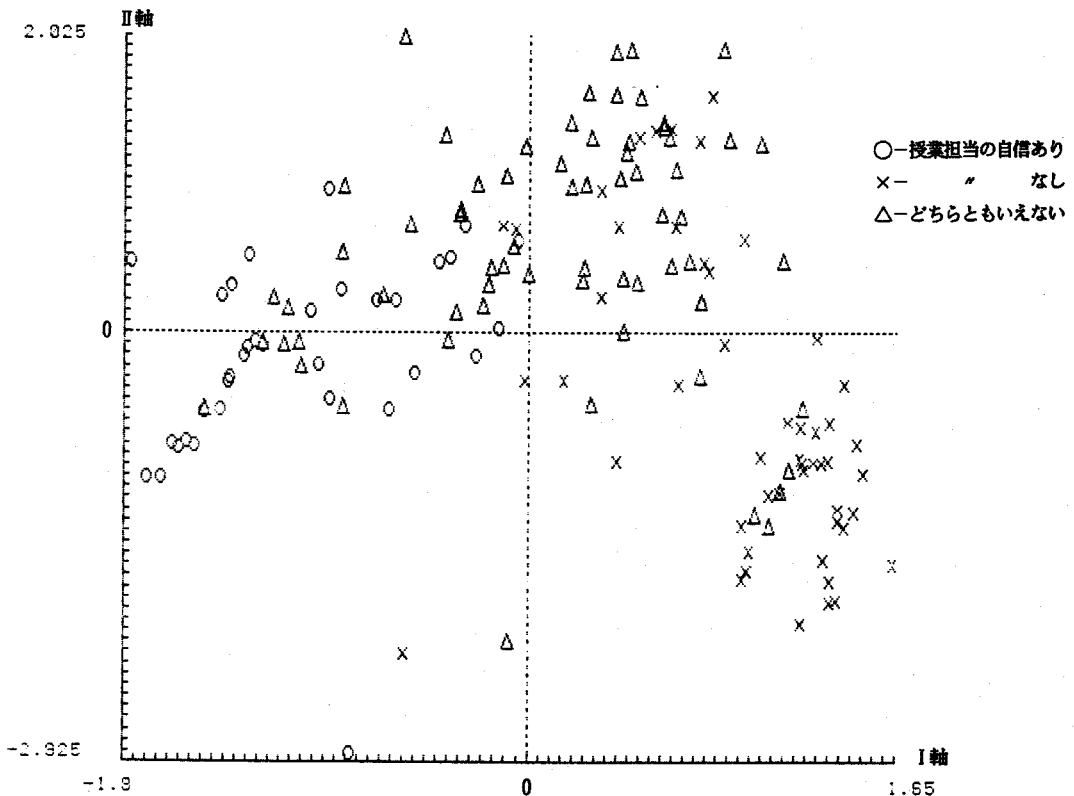
このような講義を終了した時点でアンケート調査を行ったのであり，そのデータの要因分析結果について，以下(1)～(8)の各種目毎に考察する。

(1) マット運動について

マット運動の数量化理論Ⅱ類での分析結果は第2表の通りである。

第2表の相関比を見ると，Ⅱ軸の数値(0.27441)よりもⅠ軸の相関比の数値(0.69364)が大きいので，Ⅰ軸についての数値によって判別できる。

そこで第2表の外的基準の欄を見ると，授業担



第1図 マット運動における散布図

7) 1) の著書，pp. 163～165。

当の自信がある者（51名－29.3％）と、自信がない者（52名－29.9％）とがほぼ同数であり、それを上回ってどちらともいえないという者（71名－40.8％）が存在している。

外的基準のカテゴリー数量（表では「要因」の最下欄）では、「自信あり」（-1.18208）と「自信なし」（0.95994）のそれぞれの絶対値が大きく、この2つの分離が明瞭である。第1図（Ⅰ軸をX、Ⅱ軸をYにとった散布図）を見ても「自信あり」と「自信なし」の2個の判別は明瞭である。

第2表の各要因について、偏相関係数の大きい順序に第4位まで並び換える（第4位以下はどの種目でも値は小さいので各種目の検討でも同様にする）。その結果は以下の通りである。

- | | | |
|----|--------------------|-----------|
| 1位 | 要因⑥模範演技ができるか | (0.48660) |
| 2位 | 要因①指導の意欲はあるか | (0.40979) |
| 3位 | 要因②好きか嫌いか | (0.31816) |
| 4位 | 要因⑤児童の技能を高める自信があるか | (0.17452) |

これらの順位では、要因⑥の偏相関係数の値が最も大きく、外的基準の結果に一番影響を及ぼし、続いて要因①・要因②の順となっている。

第2表の範囲の欄を見ても、要因⑥（1.18251）と要因①（0.84727）はどちらも大きく、外的基準に対して影響が大きい。

第2表の各要因の「カテゴリー数量」の欄では、「模範演技ができる（61名）」（-0.70791）が最も高く、外的基準のグループの分離に影響を与えている。このことから、「授業担当の自信あり」という外的基準のカテゴリーは、「模範演技ができる」に影響されている。逆に「模範演技ができない（50名）」（0.47460）は、「授業担当の自信なし」に影響している。また、「授業担当の自信なし」は「指導したくない（41名）」（0.57069）というカテゴリーにも影響されている。

受講生たちの授業担当の自信の有無の判断の要因となっているのは、子どもをどう変えられるかということより、自分自身からの観点である「模範

演技」・「指導の意欲」・「好き嫌い」の各要因であり、「児童の技能を高める」ことに関する要因の影響は低い。

(2) 鉄棒運動について

鉄棒運動の結果は第3表に示す通りである。

第3表の相関比を見ると、Ⅱ軸の数値（0.30009）よりもⅠ軸の相関比が大きい（0.66972）ので、Ⅰ軸についての数値によって判別できる。

第3表の外的基準の欄を見ると、授業担当の自信がある者（48名－27.6％）と、自信がない者（67名－38.5％）では、マット運動と比較して、授業担当の自信がない者が15名－8.6％も増加し、どちらともいえない者（59名－33.9％）が減少している。

外的基準のカテゴリー数量では、「自信あり」（-1.24590）と「自信なし」（0.78335）のそれぞれの絶対値が大きく、特に「自信あり」が大きい。第2図でも「自信あり」と「自信なし」の2個の判別は明瞭である。

第3表の各要因について、偏相関係数の大きい順序に第4位まで並び換える。その結果は以下の通りである。

- | | | |
|----|--------------------|-----------|
| 1位 | 要因⑥模範演技ができるか | (0.39810) |
| 2位 | 要因⑤児童の技能を高める自信があるか | (0.25169) |
| 3位 | 要因①指導の意欲はあるか | (0.23498) |
| 4位 | 要因②好きか嫌いか | (0.21942) |

これらの順位では、要因⑥の偏相関係数の値が特に大きく、外的基準の結果に他よりも特に強く影響を及ぼし、続いて要因⑤・要因①の順となり、「技能を高める自信」の有無がマット運動に比べれば影響が大きくなっている。

第3表の範囲の欄を見ても、要因⑥（0.98782）が大きく、外的基準に対して影響が大きい。

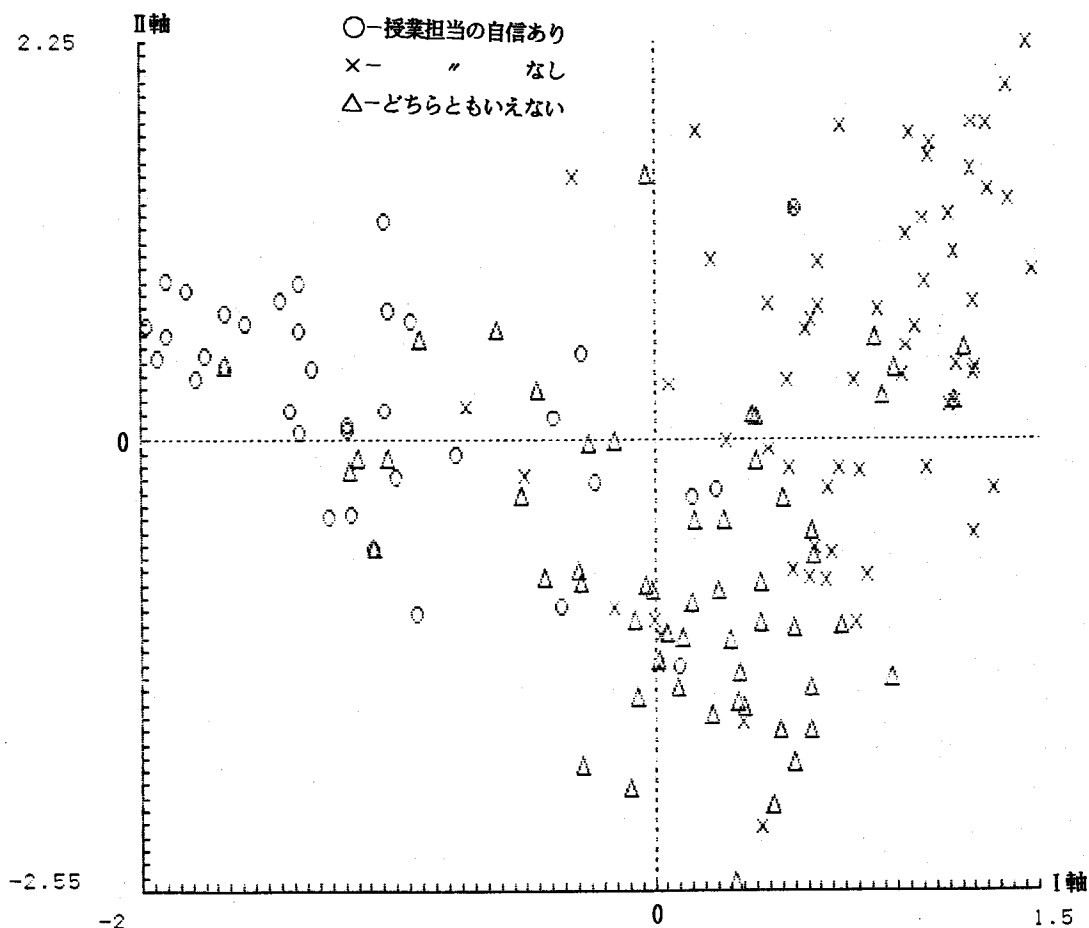
第3表の各要因のカテゴリー数量の欄では、ここでもマット運動と同じく「模範演技ができる（57名）」（-0.68896）が際立って高く、外的基準のグループの分離に影響を与えている。このこと

第3表 鉄棒運動

要 因	範 疇	人 数	Ⅰ 軸			Ⅱ 軸		
			カテゴリー 一数量	範囲	偏相関係 数	カテゴリー 一数量	範囲	偏相関係 数
要因①	指導してみたい 指導したくない どちらともいえない	89	-0.18421	0.51011	0.23498	-0.08878	0.83663	0.17725
		49	0.32589			0.44730		
		36	0.01184			-0.38933		
要因②	好きである 嫌いである どちらともいえない	54	-0.29753	0.48573	0.21942	0.13462	0.42970	0.11091
		71	0.09641			0.10126		
		49	0.18820			-0.29508		
要因③	技能の良い点わかる わからない どちらともいえない	68	-0.07256	0.12005	0.06461	0.04637	0.26394	0.05784
		40	0.04749			0.13459		
		66	0.04597			-0.12934		
要因④	技能の悪い点わかる わからない どちらともいえない	85	-0.01299	0.13065	0.06290	-0.00737	0.94359	0.17947
		42	0.08139			0.50534		
		47	-0.04925			-0.43826		
要因⑤	技能高める自信あり 自信なし どちらともいえない	49	-0.36984	0.63878	0.25169	0.31100	0.90437	0.24098
		58	0.26894			0.36283		
		67	0.03767			-0.54154		
要因⑥	模範演技ができる できない どちらともいえない	47	-0.68896	0.98782	0.39810	0.23964	0.91583	0.23503
		67	0.29886			0.34399		
		60	0.20596			-0.57184		
要因⑦	悪い見本示範できる できない どちらともいえない	83	-0.15707	0.30553	0.18207	-0.03583	0.62776	0.12467
		36	0.14847			-0.34674		
		55	0.13985			0.28102		
要因⑧	選手になった 選手になっていない	104	0.03286	0.08168	0.05559	-0.02355	0.05855	0.01823
		70	-0.04882			0.03499		
要因⑨	受講している していない	124	-0.02329	0.08103	0.05090	-0.07130	0.24813	0.07045
		50	0.05775			0.17683		
要因⑩	男子 女子	80	-0.12405	0.22962	0.15129	0.09612	0.17792	0.05553
		94	0.10557			-0.08180		
外的基 準	授業担当の自信あり 授業担当の自信なし どちらともいえない	48	-1.24590			0.30363		
		67	0.78335			0.45198		
		59	0.12405			-0.76029		
相 関 比			0.66972 (Ⅰ軸)			0.30009 (Ⅱ軸)		

から、「授業担当の自信あり」という外的基準の
カテゴリーは、「模範演技ができる」に影響され、

「技能を高める自信あり（49名）」（-0.36984）に
も影響されている。「授業担当の自信なし」は、



第2図 鉄棒運動における散布図

「指導したくない (49名)」(0.32589)と「模範演技ができない (67名)」(0.29886)のカテゴリーに影響されている。

ここでも、受講生たちには、マット運動と同じ傾向（自分自身のことの要因によって影響されている）が見られるが、「技能を高める自信あり」と「授業担当の自信あり」とのつながりはマット運動よりも強い。しかし、「授業担当の自信なし」の者の人数が増加していることでもあり、将来には指導力のある者と無い者との差が大きく開くという両極化が進む恐れもある。

(3) 跳び箱運動について

跳び箱運動の結果は第4表に示す通りである。

マット・鉄棒運動と同じ器械運動でありながら、結果において大きな違いが見られる。

第4表の相関比を見ると、II軸の数値(0.27347)よりもI軸の相関比が大きい(0.47228)ので、I軸についての数値によって判別できる。但し、判別の程度は他の器械運動よりも低い。

第4表の外的基準の欄を見ると、授業担当の自信がある者(65名-37.4%)は、他の器械運動と比較して最も多く、自信なしの者(33名-19.0%)が少なくなっており、鉄棒運動(自信なし67名)の半分までになっている。そのかわり、「どちら

第4表 跳び箱運動

要因	範 疇	人 数	I 軸			II 軸		
			カテゴリー —数量	範囲	偏相関係 数	カテゴリー —数量	範囲	偏相関係 数
要因①	指導してみたい 指導したくない どちらともいえない	110 26 38	-0.19868 0.60414 0.16176	0.80282	0.21755	0.04611 -1.16699 0.66499	1.83198	0.29357
要因②	好きである 嫌いである どちらともいえない	98 37 39	-0.08009 0.13500 0.07317	0.21509	0.06844	-0.01296 -0.47007 0.47853	0.94861	0.17708
要因③	技能の良い点わかる わからない どちらともいえない	92 20 62	-0.21118 1.11217 -0.04541	1.32335	0.33389	-0.01431 -0.43413 0.16128	0.59541	0.09888
要因④	技能の悪い点わかる わからない どちらともいえない	105 16 53	0.05701 -0.20663 -0.05057	0.26364	0.06277	-0.00429 -0.45780 0.14671	0.60451	0.08753
要因⑤	技能高める自信あり 自信なし どちらともいえない	67 35 72	-0.54756 0.12208 0.45019	0.99775	0.33552	-0.28259 -0.34357 0.42998	0.77355	0.19309
要因⑥	模範演技ができる できない どちらともいえない	86 39 49	-0.24364 0.27692 0.20721	0.52056	0.16347	-0.25551 -0.15077 0.56845	0.82396	0.19541
要因⑦	悪い見本示範できる できない どちらともいえない	103 22 49	0.03288 -0.06746 -0.03882	0.10033	0.03347	0.05524 0.75237 -0.45391	1.20628	0.19699
要因⑧	選手になった 選手になっていない	104 70	-0.01645 0.02443	0.04088	0.02290	0.00692 -0.01028	0.01721	0.00509
要因⑨	受講している していない	124 50	-0.05989 0.14852	0.20841	0.08597	0.14432 -0.35792	0.50224	0.13380
要因⑩	男子 女子	80 94	-0.28530 0.24280	0.52810	0.22327	-0.06498 0.05530	0.12029	0.03482
外的基 準	授業担当の自信あり 授業担当の自信なし どちらともいえない	65 33 76	-0.81274 1.02145 0.25158			-0.27587 -0.75120 0.56212		
相 関 比			0.47228 (I軸)			0.27347 (II軸)		

ともいえない」者（76名—43.7%）が増えている。（1.02145）と「自信あり」（-0.81274）のそれぞれ
 外的基準のカテゴリー—数量では、「自信なし」の絶対値が大きい。但し、「自信なし」の人数

は少数（33名）である。第3図を見ると、3個の群は他の種目と比較すれば交錯している。

第4表の各要因について、偏相関係数の大きい順序に第4位まで並び換える。その結果は以下の通りである。

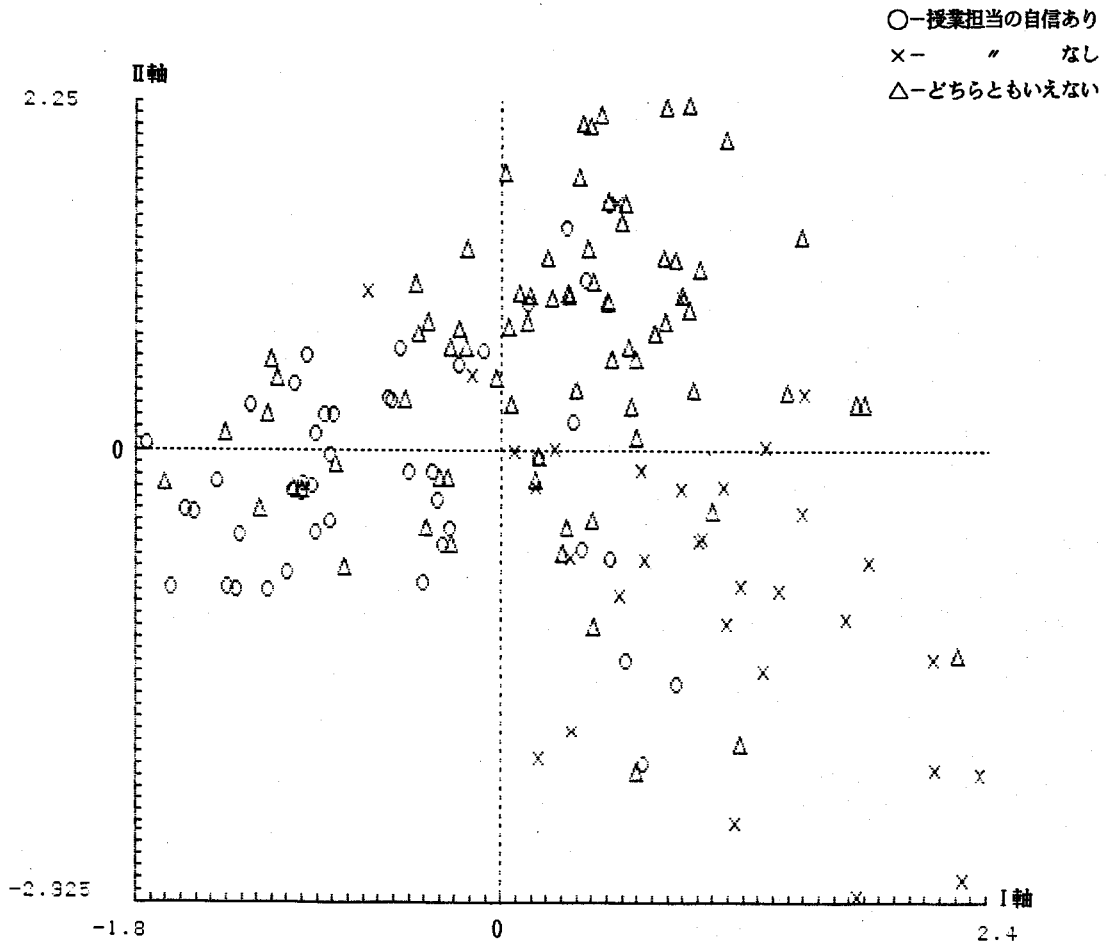
- 1位 要因⑤児童の技能を高める自信があるか (0.33552)
- 2位 要因③技能の良い点がわかるか (0.33389)
- 3位 要因④性別 (0.22327)
- 4位 要因①指導の意欲はあるか (0.21755)

これらの順位では、他の器械運動とは違い、要因⑤の偏相関係数の値が最も大きく、外的基準の

結果に一番影響を及ぼし、続いて要因③の順となって、いずれも「技能を高める」ことに関する要因が上位を占めている。さらに、性別の影響がこの種目のみ上位に上がって影響を及ぼしている。

第4表の範囲の欄を見ても、要因③ (1.32335) と要因⑤ (0.99775) は大きく、外的基準に対して影響が大きい。

第4表の各要因のカテゴリー数量の欄では、「指導したくない (26名)」(0.60414) と「技能の良い点がわからない (20名)」(1.11217) の数値が大きい、いずれも少数の者の結果から生じたものである。「技能を高める自信あり (67名)」(—



第3図 跳び箱運動における散布図

0.54756)の数値により、要因⑤が外的基準の判別に最も影響を与える結果となり、「授業担当の

自信あり」という外的基準のカテゴリーは、「技能を高める自信あり」に影響されている。

第5表 クロール

要因	範 疇	人 数	I 軸			II 軸		
			カテゴリー 一数量	範囲	偏相関係数	カテゴリー 一数量	範囲	偏相関係数
要因①	指導してみたい 指導したくない どちらともいえない	100 33 41	-0.14752 0.46107 -0.01129	0.60859	0.23989	0.08567 -0.78213 0.42058	1.20271	0.31525
要因②	好きである 嫌いである どちらともいえない	90 34 50	-0.03339 -0.03386 0.08313	0.11698	0.07303	-0.17235 0.35065 0.07179	0.52300	0.15904
要因③	技能の良い点わかる わからない どちらともいえない	82 30 62	-0.14104 0.48426 -0.04779	0.62529	0.23277	0.04272 -0.55051 0.20987	0.76037	0.18604
要因④	技能の悪い点わかる わからない どちらともいえない	94 23 57	-0.00415 -0.30355 0.12933	0.43288	0.14753	0.06260 0.34914 -0.24412	0.59327	0.14283
要因⑤	技能高める自信あり 自信なし どちらともいえない	65 41 68	-0.37192 0.56956 0.01210	0.94148	0.33458	-0.06150 -0.44250 0.32559	0.76808	0.21887
要因⑥	模範演技ができる できない どちらともいえない	75 44 55	-0.48184 0.57498 0.19707	1.05682	0.41308	-0.48588 -0.22437 0.84206	1.32793	0.44896
要因⑦	悪い見本示範できる できない どちらともいえない	100 22 52	-0.04384 -0.09035 0.12252	0.21287	0.11029	-0.12730 0.29237 0.12111	0.41968	0.13145
要因⑧	選手になった 選手になっていない	104 70	0.03012 -0.04474	0.07486	0.05426	-0.03590 0.05334	0.08924	0.04059
要因⑨	受講している していない	124 50	0.07028 -0.17430	0.24458	0.15992	-0.02244 0.05564	0.07808	0.03371
要因⑩	男子 女子	80 94	0.00626 -0.00533	0.01159	0.00825	-0.14490 0.12332	0.26822	0.12551
外的基準	授業担当の自信あり 授業担当の自信なし どちらともいえない	67 44 63	-0.90154 1.21683 0.10894			-0.45540 -0.63248 0.92605		
相 関 比			0.69169 (I軸)			0.49152 (II軸)		

「授業担当の自信なし」の者は少数(33名)ではあるが、そのカテゴリーには「指導したくない(26名)」(0.60414)と「技能の良い点がわからない(20名)」(1.11217)というカテゴリーが影響を及ぼしている。「模範演技ができるかどうか」についてはここでは下位に位置している。

マット運動・鉄棒運動と同じ器械運動でありながら、このように「技能を高める」ことに関する要因が上位にあるという相違が生じたのは、「体育科教材研究」の講義の中での取り上げ方に差があったためと推察する。講義では前述の如く跳び箱運動が重点的に扱われ、向山氏の資料によって、指導の方法・原則及び結果が受講生に十分

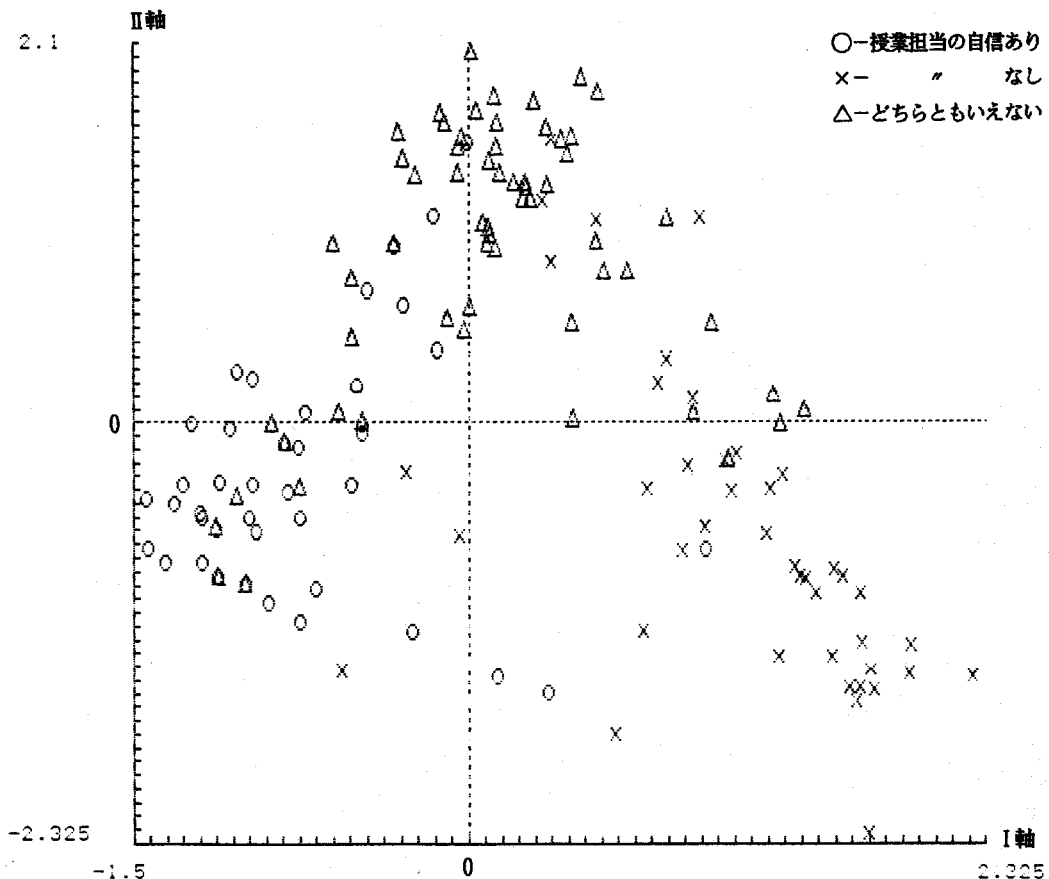
知れ渡っていることの影響がデータに現れたのであろう。この種目に関しては、受講生は「子どもを変える」ことについて認識していると言えよう。

実技指導力の養成において、実技の練習を積んでのやり方ばかりでなく、先人の方法を知らしめることでも、受講生に対して心理的な支え(自信)を持たせられることが可能であることを示唆しているものと思う。

(4) クロールについて

クロールの結果は第5表に示す通りである。

第5表の相関比を見ると、I軸(0.69169)とII軸(0.49152)のいずれも数値が高いが、I軸の数



第4図 クロールにおける散布図

値により判別できる。

第5表の外的基準の欄を見ると、授業担当の自信ありの者(67名-38.5%)が最も多く、どちらともいえない者(63名-36.2%)とほぼ同じである。自信なしの者(44名-25.3%)は水泳の中では一番少ない。

外的基準のカテゴリー数量では、「自信なし」(1.21683)と「自信あり」(-0.90154)のそれぞれの絶対値が大きく、Ⅱ軸の数値では「どちらともいえない」(0.92605)が特に大きい。従って、第4図を見ても3個の群の判別は明瞭であり、全体的にはっきり分かれている。

第5表の各要因について、偏相関係数の大きい順序に第4位まで並び換える。その結果は以下の通りである。

- 1位 要因⑥模範演技ができるか (0.41308)
- 2位 要因⑤児童の技能を高める自信があるか (0.33458)
- 3位 要因①指導の意欲はあるか (0.23989)
- 4位 要因③技能の良い点がわかるか (0.23277)

これらの順位では、要因⑥の偏相関係数の値が最も大きく、外的基準の結果に一番影響を及ぼし、続いて要因⑤の順となっている。

第5表の範囲の欄を見ても、要因⑥(1.05682)と要因⑤(0.94148)は大きく、外的基準に対して影響が大きい。

第5表の各要因の「カテゴリー数量」の欄では、「模範演技ができない(44名)」(0.57498)と「技能を高める自信なし(41名)」(0.56956)が高く、外的基準のグループの分離に影響を与えていた。要因⑥の「模範演技ができる(75名)」(-0.48184)もカテゴリー数量が大きく、従って要因⑥が、外的基準の判別にもっとも強い影響を与えている。

「授業を担当する自信がない」に影響しているのは「技能を高める自信なし」と「技能の良い点がわからない(30名)」(0.48426)と「指導したくない(33名)」(0.46107)というカテゴリーである。

以上のことから、「模範演技ができるかどうか」

の要因が、受講生たちの授業担当の自信の有無を大きく左右していることがわかる。

(5) 平泳ぎについて

平泳ぎの結果は第6表に示す通りである。

第6表の相関比を見ると、Ⅱ軸の数値(0.39310)よりもⅠ軸の相関比が大きい(0.77762)ので、Ⅰ軸についての数値によって判別できる。

第6表の外的基準の欄を見ると、授業担当の自信がある者(62名-35.6%)と自信なしの者(62名-35.6%)とが同数であり、どちらともいえないという者(50名-28.7%)は他種目と比較しても最少である。

外的基準のカテゴリー数量では、「自信なし」(1.09102)と「自信あり」(-0.98958)のそれぞれの絶対値が大きく、Ⅱ軸の数値では「どちらともいえない」(0.98330)が特に大きい。従って、第5図を見ても3個の判別は明瞭であり、全体的にはっきり分かれている。

第6表の各要因について、偏相関係数の大きい順序に第4位まで並び換える。結果は以下の通りである。

- 1位 要因⑥模範演技ができるか (0.33718)
- 2位 要因③技能の良い点がわかるか (0.28913)
- 3位 要因②好きか嫌いか (0.26032)
- 4位 要因①指導の意欲はあるか (0.24214)

これらの順位では、要因⑥の偏相関係数の値が大きく、外的基準の結果に一番影響を及ぼし、続いて要因③の順となっている。

第6表の範囲の欄を見ても、要因⑥(0.78987)と要因③(0.68690)は大きく、外的基準に対して影響が大きい。

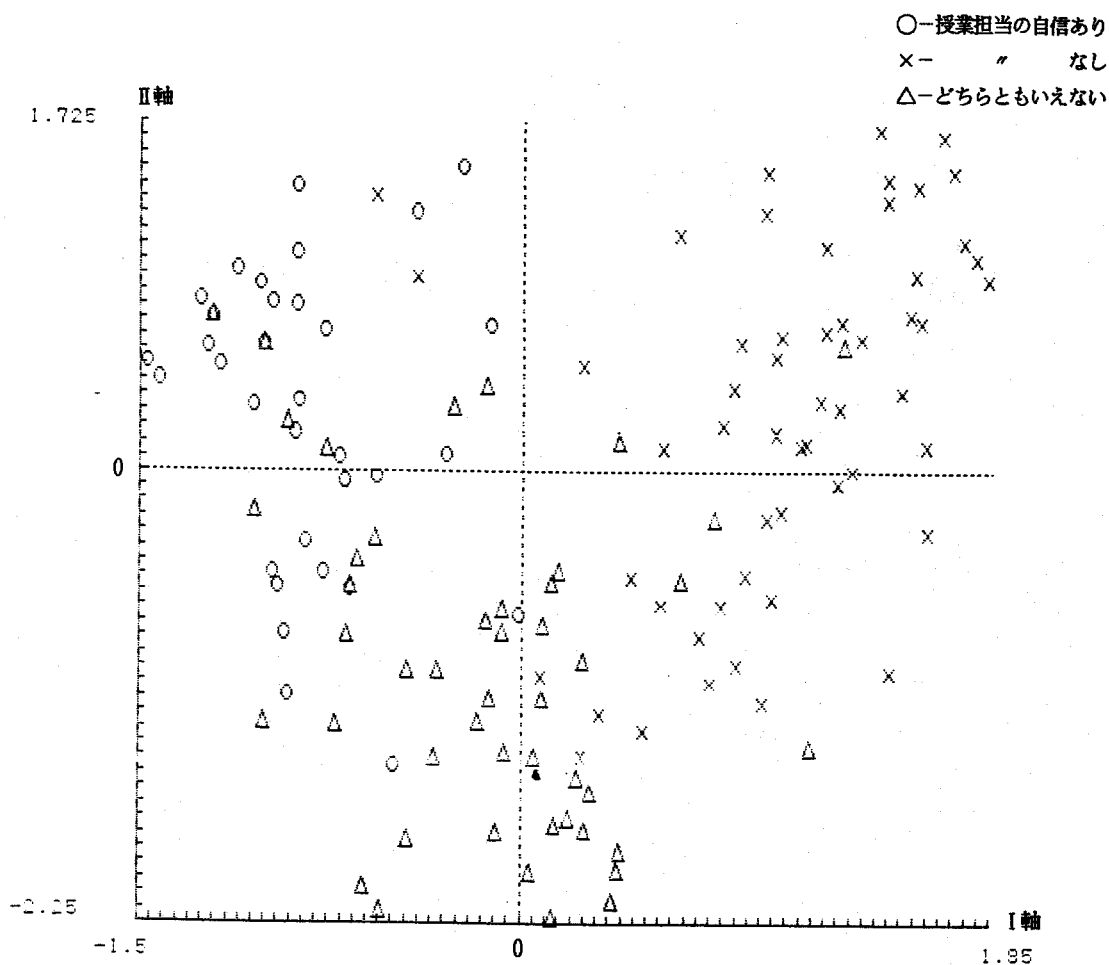
第6表の各要因の「カテゴリー数量」の欄では、「技能の良い点がわからない(38名)」(0.48845)が最も高いが、少数者の結果である。次の「模範演技ができない(59名)」(0.42986)の結果が外的基準のグループの分離に大きな影響を与えていると言えよう。要因⑥ではクロールと同じく、「模範演技ができる(74名)」(-0.32001)もカテゴリー

第6表 平泳ぎ

要因	範 疇	人 数	Ⅰ 軸			Ⅱ 軸		
			カテゴリ 一数量	範囲	偏相関係 数	カテゴリ 一数量	範囲	偏相関係 数
要因①	指導してみたい 指導したくない どちらともいえない	87 44 43	-0.20067 0.26291 0.13698	0.46357	0.24216	-0.01169 0.44083 -0.42744	0.86827	0.21663
要因②	好きである 嫌いである どちらともいえない	98 36 40	-0.17553 0.26171 0.19451	0.43724	0.26032	0.04268 -0.02613 -0.08104	0.12371	0.03549
要因③	技能の良い点わかる わからない どちらともいえない	78 38 58	-0.19846 0.48845 -0.05312	0.68690	0.28913	-0.26780 0.23502 0.20617	0.50282	0.15642
要因④	技能の悪い点わかる わからない どちらともいえない	86 37 51	0.02252 -0.16546 0.08207	0.24753	0.11514	0.17444 0.19965 -0.43900	0.63865	0.19913
要因⑤	技能高める自信あり 自信なし どちらともいえない	62 53 59	-0.21879 0.15911 0.08699	0.37789	0.20709	0.49207 0.46654 -0.93618	1.42825	0.43731
要因⑥	模範演技ができる できない どちらともいえない	74 59 41	-0.32001 0.42986 -0.04099	0.74987	0.33718	0.31975 0.00051 -0.57783	0.89758	0.23594
要因⑦	悪い見本示範できる できない どちらともいえない	92 32 49	-0.07094 0.15883 0.02622	0.22977	0.12598	0.00084 -0.35696 0.23883	0.59579	0.14342
要因⑧	選手になった 選手になっていない	104 70	0.01906 -0.02832	0.04738	0.04155	-0.03603 0.05353	0.08956	0.03374
要因⑨	受講している していない	124 50	0.06098 -0.15123	0.21221	0.17208	0.09034 -0.22405	0.31439	0.10981
要因⑩	男子 女子	80 94	-0.12869 0.10953	0.23822	0.20243	-0.04248 0.03615	0.07863	0.02974
外的基準	授業担当の自信あり 授業担当の自信なし どちらともいえない	62 62 50	-0.98958 1.09102 -0.12579			0.46376 0.32922 -0.98330		
相 関 比		0. 7 7 7 6 2 (Ⅰ軸)				0. 3 9 3 1 0 (Ⅱ軸)		

一数量が大きく、従って要因⑥が外的基準の判別にもっとも強い影響を与えている。「授業を担

当する自信がない」に影響しているのは「模範演技ができない」と「技能の良い点がわからない(37



第5図 平泳ぎにおける散布図

名)」(0.48845)というカテゴリーである。

以上のことから、クロールと同様に「模範演技ができるかどうか」の要因が、受講生たちの授業担当の自信の有無を左右しているのがわかる。

(6) 逆飛び込みについて

逆飛び込みの結果は第7表に示す通りである。

第7表の相関比を見ると、II軸の数値(0.27228)よりもI軸の相関比が大きい(0.72425)ので、I軸についての数値によって判別できる。

第7表の外的基準の欄を見ると、授業担当の自信がある者(59名-33.9%)と自信なしの者(60名-34.5%)とがほぼ同数であり、どちらともい

えないという者(55名-31.6%)が少ない。

外的基準のカテゴリー数量では、「自信なし」(1.06900)と「自信あり」(-0.98063)のそれぞれの絶対値が大きく、この2つの分離が明瞭である。第6図を見ても「自信あり」と「自信なし」の判別は明瞭である。

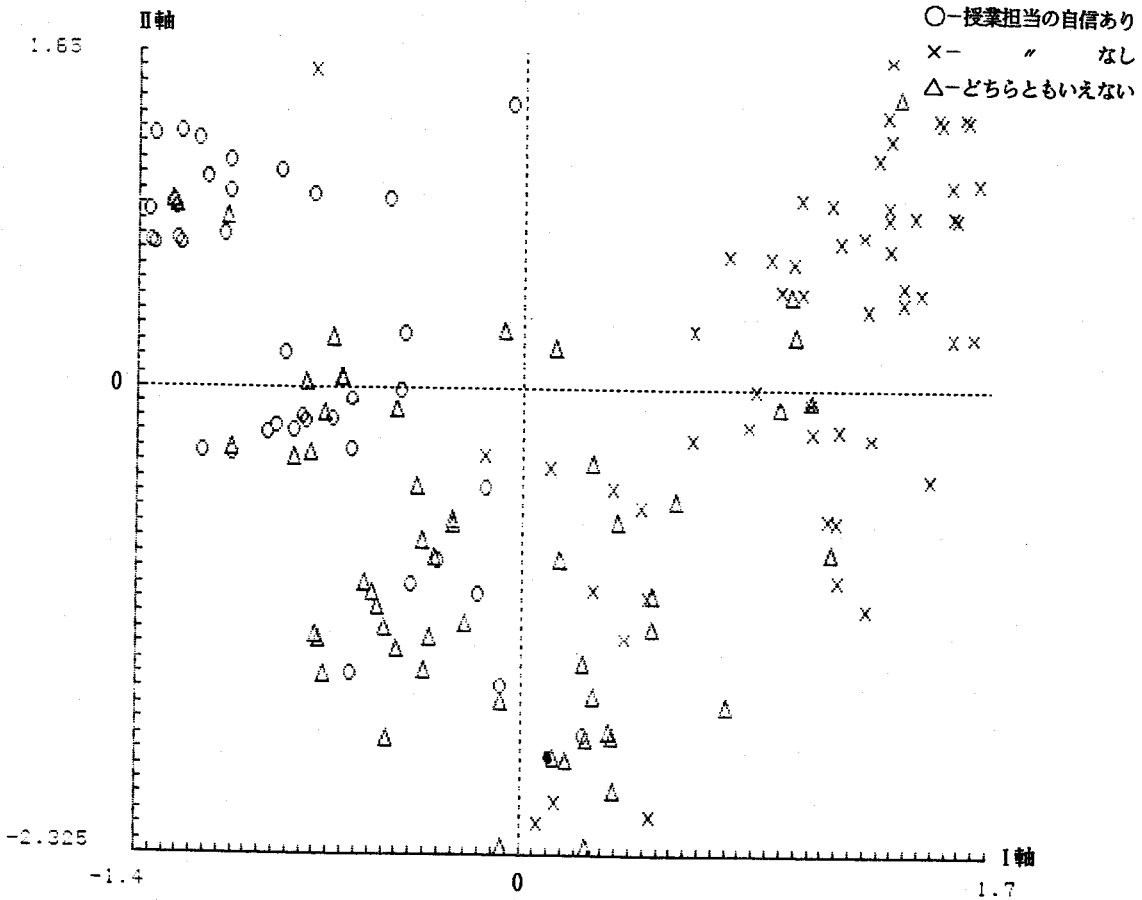
第7表の各要因について、偏相関係数の大きい順序に第4位まで並び換える。結果は以下の通りである。

1位	要因⑥模範演技ができるか	(0.50528)
2位	要因②好きか嫌いか	(0.24456)
3位	要因⑤技能を高められるか	(0.19146)

第7表 逆飛び込み

要因	範 疇	人 数	Ⅰ 軸			Ⅱ 軸		
			カテゴリ -数量	範囲	偏相関係 数	カテゴリ -数量	範囲	偏相関係 数
要因①	指導してみたい	81	-0.16089	0.38823	0.17579	-0.24676	0.64749	0.13183
	指導したくない	51	0.22734			0.40073		
	どちらともいえない	42	0.03422			-0.01071		
要因②	好きである	72	-0.22055	0.43158	0.24456	0.35374	1.09768	0.24728
	嫌いである	57	0.11199			0.14049		
	どちらともいえない	45	0.21103			-0.74394		
要因③	技能の良い点わかる	88	-0.14559	0.49125	0.18083	-0.24983	0.85159	0.11226
	わからない	29	0.34566			0.60177		
	どちらともいえない	57	0.04891			0.07953		
要因④	技能の悪い点わかる	94	0.04548	0.34272	0.12011	0.20403	0.60592	0.08147
	わからない	22	-0.29725			-0.40190		
	どちらともいえない	58	0.03905			-0.17822		
要因⑤	技能高める自信あり	60	-0.19512	0.48324	0.19146	0.37822	1.28573	0.29107
	自信なし	41	0.28812			0.62426		
	どちらともいえない	73	-0.00145			-0.66147		
要因⑥	模範演技ができる	68	-0.59327	1.29252	0.50528	0.50609	1.04502	0.21563
	できない	59	0.69925			-0.15397		
	どちらともいえない	47	-0.01943			-0.53894		
要因⑦	悪い見本示範できる	96	-0.04262	0.23398	0.10778	-0.13495	0.37548	0.08024
	できない	28	0.19136			0.03319		
	どちらともいえない	50	-0.02533			0.24053		
要因⑧	選手になった	104	-0.00744	0.01850	0.01435	0.06885	0.17114	0.05035
	選手になっていない	70	0.01106			-0.10229		
要因⑨	受講している	124	0.00386	0.01345	0.00966	-0.00614	0.02138	0.00573
	していない	50	-0.00958			0.01524		
要因⑩	男子	80	0.05200	0.09626	0.07204	0.00579	0.01071	0.00312
	女子	94	-0.04426			-0.00493		
外的基準	授業担当の自信あり	59	-0.98063			0.41133		
	授業担当の自信なし	60	1.06900			0.29617		
	どちらともいえない	55	-0.11423			-0.76434		
相 関 比			0.72425 (Ⅰ軸)			0.27228 (Ⅱ軸)		

4 位 要因③技能の良い点がわかるか (0.18083) 飛び抜けて大きく、外的基準の結果に特に強く影響を及ぼし、続いて要因②の順となっている。



第6図 逆飛び込みにおける散布図

第7表の範囲の欄を見ても、要因⑥ (1.29252) が大きく、外的基準に対して影響が大きい。

第7表の各要因の「カテゴリー数量」の欄では、「模範演技ができない (59名)」(0.69925)と「模範演技ができる (68名)」(-0.59327)の2つがともに高く、要因⑥は外的基準のグループの分離に大きな影響を与えている。

以上のことから、クロール・平泳ぎと同様に「模範演技ができるかどうか」の要因が、受講生たちの授業担当の自信の有無を大きく左右しているのがわかる。

水泳についてはいずれも「模範演技」に関する数値が高いことが特徴的である。

(7) サッカーについて

サッカーの結果は第8-1表に示す通りである。

第8-1表の相関比を見ると、II軸の数値よりも (0.36384)、I軸の相関比が大きい (0.56872) ので、I軸についての数値によって判別できる。

第8-1表の外的基準の欄を見ると、授業担当の自信がある者 (49名-28.2%)と自信なしの者 (46名-26.4%)とがほぼ同数であり、どちらともいえないという者 (79名-45.4%)が多い。

外的基準のカテゴリー数量では、「自信あり」(-1.09690)と「自信なし」(0.91170)のそれぞれの絶対値が大きく、この2つの分離が明瞭である。第7図を見ても「自信あり」と「自信なし」

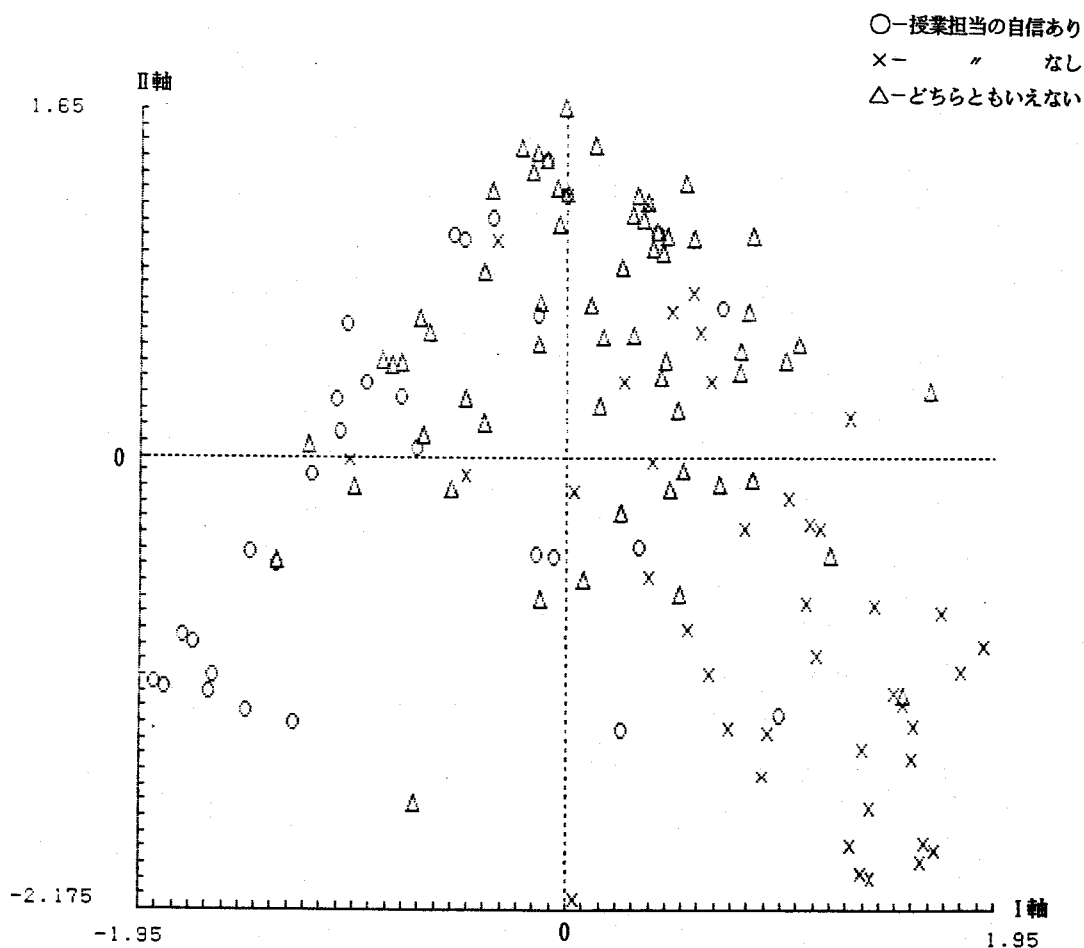
第8-1表 サッカー

要 因	範 疇	人 数	Ⅰ 軸			Ⅱ 軸		
			カテゴリー —数量	範囲	偏相関係 数	カテゴリー —数量	範囲	偏相関係 数
要因①	指導してみたい 指導したくない どちらともいえない	96 25 53	-0.28850 0.75035 0.16863	1.03886	0.31105	0.16362 -0.54267 -0.04039	0.70629	0.14590
要因②	好きである 嫌いである どちらともいえない	111 16 47	0.03265 -0.26092 0.01172	0.29357	0.07939	0.03493 -0.10353 -0.04724	0.13845	0.03068
要因③	技能の良い点わかる わからない どちらともいえない	57 33 84	-0.10933 -0.06613 0.10016	0.20949	0.09921	0.12767 -0.01661 -0.08011	0.20778	0.04827
要因④	技能の悪い点わかる わからない どちらともいえない	55 31 88	-0.15274 0.21951 0.01813	0.37224	0.11951	-0.27467 -0.37937 0.30531	0.68468	0.18098
要因⑤	技能高める自信あり 自信なし どちらともいえない	36 45 93	-0.68652 0.61097 -0.02988	1.29749	0.33091	-0.87334 0.12239 0.27884	1.15218	0.24557
要因⑥	模範演技ができる できない どちらともいえない	46 49 79	-0.54463 0.24214 0.16694	0.78677	0.25295	-0.39662 -0.57254 0.58606	1.15860	0.32418
要因⑦	悪い見本示範できる できない どちらともいえない	57 23 94	0.10163 -0.13977 -0.02743	0.24140	0.07515	0.21207 -0.49045 -0.00859	0.70252	0.14405
要因⑧	選手になった 選手になっていない	104 70	0.01818 -0.02701	0.04519	0.02491	-0.01084 0.01611	0.02695	0.00979
要因⑨	受講している していない	73 101	-0.14536 0.10506	0.25042	0.08703	0.20551 -0.14854	0.35404	0.08077
要因⑩	男子 女子	80 94	-0.18433 0.15688	0.34121	0.11506	0.27770 -0.23634	0.51405	0.11323
外的基準	授業担当の自信あり 授業担当の自信なし どちらともいえない	49 46 79	-1.09690 0.91170 0.14949			-0.39801 -0.69330 0.65056		
相 関 比			0. 5 6 8 7 2 (Ⅰ軸)			0. 3 6 3 8 4 (Ⅱ軸)		

の判別は明瞭である。

きい順序に第4位まで並び換える。結果は以下の通りである。

第8-1表の各要因について、偏相関係数の大



第7図 サッカーにおける散布図

- 1位 要因⑤技能を高められるか (0.33091)
- 2位 要因①指導の意欲 (0.31105)
- 3位 要因⑥模範演技ができるか (0.25295)
- 4位 要因③技能の悪い点がわかるか (0.11951)

これらの順位では、要因⑤・①の偏相関係数の値が大きく、外的基準の結果に影響を及ぼし、続いて要因⑥の順となっている。

第8—1表の範囲の欄を見ると、要因⑤(1.29749)と要因①(1.03886)は大きく、外的基準に対して影響が大きい。

第8—1表の各要因の「カテゴリ—数量」の欄では、「指導したくない(25名)」(0.75035)の値

が高いが、少数者の結果である。「技能を高める自信あり(36名)」(−0.68625)と「技能を高める自信なし(45名)」(0.61097)の両者はともに高く、要因⑤は外的基準のグループの判別に大きな影響を与えている。「授業を担当する自信あり」に影響しているのは「技能を高める自信あり」と「模範演技ができる(46名)」(−0.54463)であり、「授業を担当する自信なし」に影響しているのは「指導したくない」と「技能を高める自信なし」というカテゴリである。

以上のことから、「技能を高める自信があるか」の要因が、受講生たちの授業担当の自信の有無の

判別に最も影響を与えているのがわかる。克服スポーツの器械運動（マット運動と鉄棒運動）・水泳とは違った傾向が見られる。

「Ⅱ類体育実技」の授業では、サッカーを女子に、表現運動を男子対象にそれぞれ指導カリキュラムを組んでいる。そこで、クロス集計表（第8－2表参照）によって男女の傾向を見る。

サッカーでは、男子で授業担当自信ありの者は34名－80名中42.5%，自信なしの者11名－80名中13.8%，どちらともいえない者は35名－80名中43.8%である。「指導の意欲」・「好き嫌い」の要因では、「意欲あり（55名）」・「好き（61名）」が多くなっており、共に「どちらともいえない」が減少している。技能に関する要因と模範演技に関する要因については、大体授業担当の自信の有無と同じ傾向にある。

女子では、授業担当の自信ありの者は15名－94名中16%，自信なしの者35名－94名中37%，どちらともいえない者は44名－94名中47%である。Ⅱ類体育実技を受講した女子学生73名の中で、自信ありは12名、自信なしは25名、どちらともいえない者は36名である。女子には自信ありの者が少なかったが、これは運動経験の少なさが影響しているものと思われる。

女子の「指導の意欲」・「好き嫌い」の要因では、「意欲あり（41名）」・「好き（50名）」が多くなっており、「授業担当の自信あり」の人数と比べた場合、その増え方は男子以上の変動である。技能に関する要因では、授業担当の自信の有無における人数と比べて「どちらともいえない」の人数が増えている。「模範演技」の要因では男子と同様に、授業担当の自信の有無の要因と同じ傾向である。

各要因の 카테고리毎の人数の割合は男女差が見られるが、要因間の変動の仕方は、男女同じ傾向が見られる。

(8) 表現運動について

表現運動の結果は第9－1表に示す通りである。

第9－1表の相関比を見ると、Ⅱ軸の数値よりも(0.16338)，Ⅰ軸の相関比が大きい(0.48600)ので、Ⅰ軸についての数値によって判別できる。

第9－1表の外的基準の欄を見ると、授業担当の自信ありの者(19名－10.9%)が非常に少ない。授業担当の自信なしの者(77名－44.3%)とどちらともいえないという者(78名－44.8%)とがほぼ同数である。この数値からは、表現運動が受講生には受け入れられていないことが窺える。他種目と比較しても、自信ありの者が最少であり、自信なしの者が最多であり、また、要因①～⑦において、表現運動が否定的回答(なし・できない・わからない等)の人数でもトップにあることからとも言える。

外的基準のカテゴリー数量では、「自信あり」(1.28089)と「自信なし」(－0.72619)のそれぞれの絶対値が大きく、この2つの分離が明瞭である。但し、「自信あり」の人数は少数(19名)である。第8図を見れば「自信あり」と「自信なし」の判別は明瞭である。

第9表の各要因について、偏相関係数の大きい順序に第4位まで並び換えてみる。その結果は以下の通りである。

- | | | |
|----|----------------|-----------|
| 1位 | 要因②好きか嫌いか | (0.28208) |
| 2位 | 要因①指導の意欲 | (0.24750) |
| 3位 | 要因⑤技能を高められるか | (0.23414) |
| 4位 | 要因③技能の良い点がわかるか | (0.18909) |

これらの順位では、要因②の偏相関係数の値が大きく、外的基準の結果に影響を及ぼし、続いて要因①の順となっている。

第9－1表の範囲の欄を見ると、要因②(1.03189)と要因⑤(0.89531)及び要因④(0.7113)が大きく、外的基準に対して影響が大きい。

第9－1表の各要因の「カテゴリー数量」の欄では、「好きである(33名)」(0.68660)と「技能を高める自信あり(20名)」(0.66055)の両者が共に高く、「授業担当の自信あり」に影響しているが、いずれも少数者の結果から出たものである。

第8-2表

	サッカー	要因 ①		要因 ②		要因 ③		要因 ④		要因 ⑤		要因 ⑥		要因 ⑦		要因 ⑧		要因 ⑨		要因 ⑩	
		有	無 ?	好	嫌 ?	可	不 ?	可	不 ?	有	無 ?	可	不 ?	可	不 ?	有	無	済	未	男 80	女 94
外的基準	授業を担当する自信がある	45	0 4	43	1 5	34	4 11	32	4 13	30	1 18	34	5 10	28	4 17	32	17 12	37	34 15		
	“ ない	8	20 18	16	12 18	6	19 21	7	19 20	2	29 15	2	33 11	10	15 21	26	20 25	21	11 35		
	どちらともいえない	43	5 31	52	3 24	17	10 52	16	8 55	4	15 60	10	11 58	19	4 56	45	33 38	42	35 44		
要因①	指導してみたい	96	0 0	79	2 15	46	10 40	45	8 43	35	11 50	42	10 44	40	7 49	60	36 30	66	55 41		
	指導したくない	0	25 0	7	11 7	4	13 8	3	13 9	1	18 6	1	20 4	8	10 7	16	9 15	10	6 19		
	どちらともいえない	0	0 53	25	3 25	7	10 36	7	10 36	0	16 37	3	19 31	9	6 38	28	25 28	25	19 34		
要因②	自分自身は好きである	79	7 25	111	0 0	48	12 51	47	12 52	34	13 64	44	13 54	42	9 60	69	42 40	71	61 50		
	“ 嫌いである	2	11 3	0	16 0	1	10 5	2	9 5	0	15 1	0	15 1	6	7 3	9	7 8	8	6 10		
	どちらともいえない	15	7 25	0	0 47	8	11 28	6	10 31	2	17 28	2	21 24	9	7 31	26	21 25	22	13 34		
要因③	児童の技能の良い点がわかる	46	4 7	48	1 8	57	0 0	46	3 8	31	6 20	34	7 16	36	4 17	40	17 14	43	39 18		
	“ わからぬ	10	13 10	12	10 11	0	33 0	3	22 8	2	22 9	3	21 9	10	10 13	16	17 18	15	10 23		
	どちらともいえない	40	8 36	51	5 28	0	0 84	6	6 72	3	17 64	9	21 54	11	9 64	48	36 41	43	31 53		
要因④	児童の技能の悪い点がわかる	45	3 7	47	2 6	46	3 6	55	0 0	28	9 18	30	8 17	34	3 18	36	19 11	44	39 16		
	“ わからぬ	8	13 10	12	9 10	3	22 6	0	31 0	2	17 12	3	19 9	8	11 12	15	16 16	15	12 19		
	どちらともいえない	43	9 36	52	5 31	8	8 72	0	0 88	6	19 63	13	22 53	15	9 64	53	35 46	42	29 59		
要因⑤	児童の技能を高める自信がある	35	1 0	34	0 2	31	2 3	28	2 6	36	0 0	29	2 5	28	1 7	24	12 7	29	28 8		
	“ ない	11	18 16	13	15 17	6	22 17	9	17 19	0	45 0	1	34 10	11	14 20	25	20 25	20	13 32		
	どちらともいえない	50	6 37	64	1 28	29	9 64	18	12 63	0	0 93	16	13 64	18	8 67	55	38 41	52	39 54		
要因⑥	模範演技ができる	42	1 3	44	0 2	34	3 9	30	3 13	29	1 16	46	0 0	33	0 13	33	13 10	36	34 12		
	“ できない	10	20 19	13	15 21	7	21 21	8	19 22	2	34 13	0	49 0	10	19 20	26	23 26	23	12 37		
	どちらともいえない	44	4 31	54	1 24	16	9 54	17	9 53	5	10 64	0	0 79	14	4 61	45	34 37	42	34 45		
要因⑦	悪い見本を示範できる	40	8 9	42	6 9	36	10 11	34	8 15	28	11 18	33	10 14	57	0 0	35	22 15	42	38 19		
	“ できない	7	10 6	9	7 7	4	10 9	3	11 9	1	14 8	0	19 4	0	23 0	14	9 13	10	6 17		
	どちらともいえない	49	7 38	60	3 31	17	13 64	18	12 64	7	20 67	13	20 61	0	0 94	55	39 45	49	36 58		
要因⑧	運動部の選手になったことがある	60	16 28	69	9 26	40	16 48	36	15 53	24	25 55	33	26 45	35	14 55	104	0 42	62	51 53		
	“ ない	36	9 25	42	7 21	17	17 36	19	16 35	12	20 38	13	23 34	22	9 39	0	70 31	39	29 41		
要因⑨	Ⅱ 類体育実技を履修* した	30	15 28	40	8 25	14	18 41	11	16 46	7	25 41	10	26 37	15	13 45	42	31 73	0	0 73		
	“ 履修していない	66	10 25	71	8 22	43	15 43	44	15 42	29	20 52	36	23 42	42	10 49	62	39 0	101	80 21		

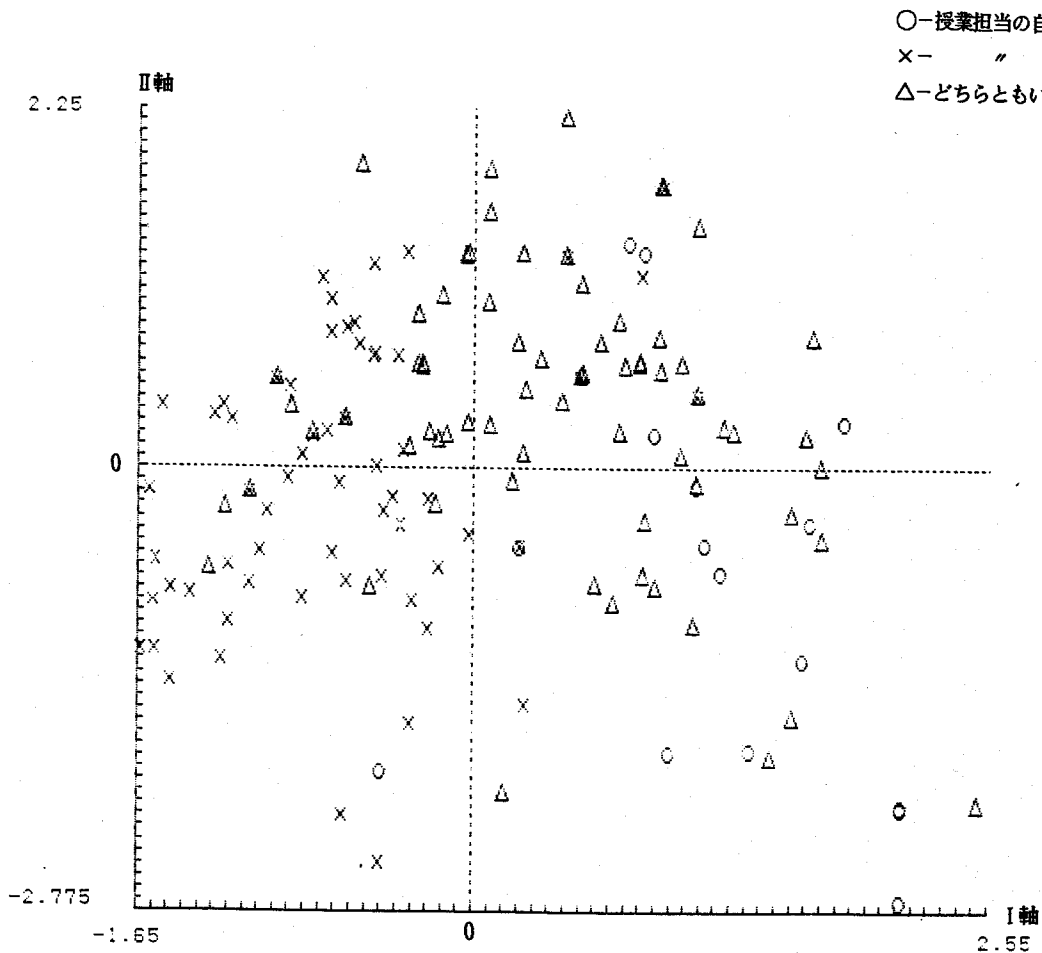
* ここでは「授業で指導を受けた者」の意味とした。従って、女子のみがこの欄に記載されている。

第9-1表 表現運動

要因	範 疇	人 数	I 軸			II 軸		
			カテゴリー -数量	範囲	偏相関係数	カテゴリー -数量	範囲	偏相関係数
要因①	指導してみたい 指導したくない どちらともいえない	61 71 42	0.29314 -0.41824 0.28126	0.71138	0.24750	0.40145 -0.57677 0.39196	0.97822	0.16007
要因②	好きである 嫌いである どちらともいえない	33 85 56	0.68660 -0.34529 0.11950	1.03189	0.28208	-0.77935 0.35738 -0.08319	1.13674	0.14345
要因③	技能の良い点わかる わからない どちらともいえない	45 57 72	-0.02237 -0.30705 0.25707	0.56412	0.18909	0.46427 -0.25267 -0.09014	0.71694	0.10164
要因④	技能の悪い点わかる わからない どちらともいえない	33 60 81	-0.12523 0.01174 0.04232	0.16755	0.05149	-0.83479 -0.36436 0.61000	1.44478	0.22729
要因⑤	技能高める自信あり 自信なし どちらともいえない	20 77 77	0.66055 0.06318 -0.23476	0.89531	0.23414	-1.33543 0.20602 0.14084	1.54145	0.18051
要因⑥	模範演技ができる できない どちらともいえない	26 74 74	0.27177 -0.19109 0.09560	0.46285	0.12696	-0.29552 0.15130 -0.04747	0.44682	0.05021
要因⑦	悪い見本示範できる できない どちらともいえない	32 52 90	0.39690 -0.25861 0.00830	0.65551	0.17037	0.16220 -0.35544 0.14770	0.51764	0.08410
要因⑧	選手になった 選手になっていない	104 70	0.00147 -0.00218	0.00365	0.00172	0.22906 -0.34032	0.56939	0.12131
要因⑨	受講している していない	51 123	-0.33046 0.13702	0.46748	0.14152	-0.29449 0.12211	0.41659	0.05896
要因⑩	男子 女子	80 94	0.21104 -0.17961	0.39065	0.12966	0.32498 -0.27658	0.60155	0.09083
外的基準	授業担当の自信あり 授業担当の自信なし どちらともいえない	19 77 78	1.28089 -0.72619 0.40487			-0.88389 -0.16892 0.38207		
相 関 比			0.48600 (I軸)			0.16338 (II軸)		

「指導したくない (71名)」(-0.41824)と「嫌いである (85名)」(-0.34529)は、各種目の中でも

最多数であり、「授業担当の自信なし」に影響しており、外的基準の判別に及ぼす影響も大きい。



第8図 表現運動における散布図

普通は嫌いであるから指導したくないと思うのであり、受講生たちの「表現運動嫌い」が自信なしに影響していると言えよう。

以上のことから、意欲や好みなどの要因が、受講生たちの授業担当の自信の有無の判別に影響を与えているのがわかる。

サッカーと同様に、男女の傾向について、クロス集計表(第9-2表参照)を見る。

女子で授業担当自信ありの者は13名-94名中13.8%, 自信なしの者37名-94名中39.4%, どちらともいえない者は44名-94名中46.8%であり, 女子のサッカーにおける比率とほとんど同じ傾向

である。「指導の意欲」では「あり(39名-94名中41.5%)」の者が多く「なし(27名-94名中28.7%)」が少ない。「好き嫌い」では「嫌い(36名-94名中38.3%)」が多く「好き(23名-94名中24.5%)」がサッカーの半数近くまで落ち込んでおり, 高校までの体育授業では好きにさせるような指導が不足しているという問題があるのではないかと考える。技能に関する要因と模範演技に関する要因では, 授業担当の自信の有無と同じ傾向にある。

男子では, 授業担当の自信ありの者はわずか6名-80名中7.5%, 自信なしの者40名-80名中50%, どちらともいえない者は34名-80名中47%で

第9—2表

	表現運動	要因①			要因②			要因③			要因④			要因⑤			要因⑥			要因⑦			要因⑧			要因⑨			要因⑩ 男80 女94	
		有	無	?	好	嫌	?	可	不	?	可	不	?	有	無	?	可	不	?	可	不	?	有	無	済	未				
外的基準	授業を担当する自信がある	14	1	4	11	0	8	10	2	7	9	3	7	9	3	7	9	1	9	9	2	8	9	10	3	16	6	13		
	“ ない	10	54	13	4	59	14	14	43	20	12	42	23	2	49	26	3	51	23	8	38	31	46	31	28	49	40	37		
	どちらともいえない	37	16	25	18	26	34	21	12	45	12	15	51	9	25	44	14	22	42	15	12	51	49	29	20	58	34	44		
要因①	指導してみたい	61	0	0	28	8	25	24	9	28	17	9	35	14	13	34	19	13	29	18	9	34	37	24	14	47	22	39		
	指導したくない	0	71	0	3	63	5	13	39	19	10	40	21	3	51	17	4	49	18	10	35	26	45	26	27	44	44	27		
	どちらともいえない	0	0	42	2	14	26	8	9	25	6	11	25	3	13	26	3	12	27	4	8	30	22	20	10	32	14	28		
要因②	自分自身は好きである	28	3	2	33	0	0	15	4	14	10	5	18	8	7	18	15	7	11	8	8	17	19	14	6	27	10	23		
	“ 嫌いである	8	63	14	0	85	0	13	44	28	12	44	29	4	58	23	6	57	22	12	39	34	53	32	32	53	49	36		
	どちらともいえない	25	5	26	0	0	56	17	9	30	11	11	34	8	12	36	5	10	41	12	5	39	32	24	13	43	21	35		
要因③	児童の技能の良い点がわかる	24	13	8	15	13	17	45	0	0	26	9	10	15	11	19	17	11	17	18	7	20	26	19	11	34	16	29		
	“ わからぬ	9	39	9	4	44	9	0	57	0	5	46	6	3	44	10	2	42	13	7	32	18	37	20	24	33	35	22		
	どちらともいえない	28	19	25	14	28	30	0	0	72	2	5	65	2	22	48	7	21	44	7	13	52	41	31	16	56	29	43		
要因④	児童の技能の悪い点がわかる	17	10	6	10	12	11	26	5	2	33	0	0	13	7	13	13	8	12	17	5	11	19	14	8	25	14	19		
	“ わからぬ	9	40	11	5	44	11	9	46	5	0	60	0	2	46	12	3	39	18	7	31	22	39	21	23	37	34	26		
	どちらともいえない	35	21	25	18	29	34	10	6	65	0	0	81	5	24	52	10	27	44	8	16	57	46	35	20	61	32	49		
要因⑤	児童の技能を高める自信がある	14	3	3	8	4	8	15	3	2	13	2	5	20	0	0	11	3	6	14	2	4	13	7	5	15	9	11		
	“ ない	13	51	13	7	58	12	11	44	22	7	46	24	0	77	0	4	51	22	8	39	30	45	32	27	50	38	39		
	どちらともいえない	34	17	26	18	23	36	19	10	48	13	12	52	0	0	77	11	20	46	10	11	56	46	31	19	58	33	44		
要因⑥	模範演技ができる	19	4	3	15	6	5	17	2	7	13	3	10	11	4	11	26	0	0	15	1	10	16	10	7	19	11	15		
	“ できない	13	49	12	7	57	10	11	42	21	8	39	27	3	51	20	0	74	0	9	44	21	43	31	23	51	36	38		
	どちらともいえない	29	18	27	11	22	41	17	13	44	12	18	44	6	22	46	0	0	74	8	7	59	45	29	21	53	33	41		
要因⑦	悪い見本を示範できる	18	10	4	8	12	12	18	7	7	17	7	8	14	8	10	15	9	8	32	0	0	18	14	12	20	14	18		
	“ できない	9	35	8	8	39	5	7	32	13	5	31	16	2	39	11	1	44	7	0	52	0	31	21	12	40	24	28		
	どちらともいえない	34	26	30	17	34	39	20	18	52	11	22	57	4	30	56	10	21	59	0	0	90	55	35	27	63	42	48		
要因⑧	運動部の選手になったことがある	37	45	22	19	53	32	26	37	41	19	39	46	13	45	46	16	43	45	18	31	55	104	0	34	70	51	53		
	“ ない	24	26	20	14	32	24	19	20	31	14	21	35	7	32	31	10	31	29	14	21	35	0	70	17	53	29	41		
要因⑨	Ⅱ類体育実技を履修した	14	27	10	6	32	13	11	24	16	8	23	20	5	27	19	7	23	21	12	12	27	34	17	51	0	51	0		
	“ 履修していない	22	44	14	10	49	21	16	35	29	14	34	32	9	38	33	19	51	53	20	40	63	70	53	0	123	29	94		

* ここでは「授業で指導を受けた者」の意味とした。従って、男子のみがこの欄に記載されている。

ある。Ⅱ類体育実技を受講した男子学生51名の中で、自信ありは3名、自信なしは28名、どちらともいえない者は20名である。「指導の意欲」・「好き嫌い」では、表現運動が好きという者は10名—80名中12.5%、嫌いの者は49名—80名中61.3%、指導してみたい者は22名—80名中27.5%、指導したくない者は44名—80名中55%であり、「どちらともいえない」者は共に減少し、はっきり拒否する傾向がある。技能に関する要因と模範演技に関する要因の人数の比率については、大体授業担当の自信の有無と同じ傾向にある。

この結果からは、女子ではサッカーと表現運動についての差があまり見られないのに対し、男子受講生には表現運動を拒否している傾向があるのがわかる。Ⅱ類体育実技では男子にのみ指導しているが、未だその効果が見られないと言えよう。

V まとめ

今回の報告で取り上げた各運動領域の中の各種目において、「水泳」の各種目とマット運動と鉄棒運動については、受講生たちは授業を担当する自信の有無を判断する場合に、『模範演技』ができるかどうかという要因によって最も影響されていることが判明した。

「跳び箱運動」では、子どもたちの『技能を高める』ことに関する要因が、授業を担当する自信の有無の判断に最も影響していることが判明した。

「表現運動」については、『指導の意欲』・『好き嫌い』という要因が、授業を担当する自信の有無の判断に影響していることが判明した。また、

授業を担当する自信のある者が非常に少なく、特に男子学生に拒否される傾向にある。

「サッカー」については、女子には授業担当の自信がある者が少ないが、子どもたちの『技能を高める』自信の有無の要因が、授業を担当する自信の有無の判断に最も影響していることが判明した。

「体育科教材研究」の講義で採り上げた「跳び箱運動」については、マット・鉄棒運動と同じ器械運動でありながら、授業担当の自信ありの者が多い。また、『模範演技』ではなく『技能を高める』ことに関する要因が、受講生たちの授業担当の自信の有無の判断に影響している。このことから、講義の内容が受講生たちの認識に影響を及ぼしていると言えよう。但し、その影響は他の種目全体にまで広がってはならず、受講生たちの実技指導力についての考え方には未熟のままの部分が存在している。

今後の学部での体育科教育においては、教師が備えているべき指導力についての認識をより深めさせなければならない。そして、実際に子どもたちの「技能を高める」ことができる力量（指導力）を身につけさせることが当面の課題となろう。

授業担当の自信の有無は、将来において積極的に指導に取り組むかどうかを左右することになり、現状には不安を覚えるが、受講生たちの「指導の意欲」の要因を見ると、今回検討した全種目において、「授業担当の自信あり」の人数よりも「教えてみたい」人数の方が上回っており、この点では彼等の今後に期待している。